

座長：高橋 悦子 (JCHO東京蒲田医療センター 歯科口腔外科部長)

摂食嚥下障害の評価と訓練の実際

東京医科歯科大学大学院医歯学総合研究科老化制御学系口腔老化制御学講座高齢者歯科学分野 准教授

戸原 玄

現在の日本では摂食嚥下機能が低下した患者に対して、入院中にリハビリを十分に行うことができないまま退院もしくは転院するケースが多い。嚥下障害が残存している状態で在宅へ移行する患者が多いが、その先で何も行われなくなる、もしくは退院時の状態が永続的なものとされて対応が続けられるのが問題なのである。極端な表現をすると、食べる機能についてのリハビリが中途なまま退院を余儀なくされているのに対し、退院後、ただそのままになっている患者が多いのである。

特に今後の日本においては訪問診療が必要とされる場面、地域が増加することは想像にたやすいが、そういった場面で食べることを評価してリハビリの場面に乗せることが重要である。視点としては地域リハビリといえる。我々の過去の調査によると、食べる機能があるにもかかわらず経管栄養のままの患者や、食べる機能が低下しているにもかかわらず普通の食事を摂取している患者が多かった。摂食嚥下リハビリを考える際の視点としては、“訓練”という目線ではなく、退院後安定した生活を送るにあたって栄養摂取方法を見直すという視点が重要なのであり、改めて地域での連携が重要になる。

今回は過去に行った胃瘻に関連する調査の内容も含め、さらに過去に作成した摂食嚥下関連医療資源マップ (<http://www.swallowing.link/>) なども紹介しつつ経口摂取を支えるためにできることを考えてみたい。

共催：ニュートリー株式会社